

本当はいない船乗り。

°CM

注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

あらすじ

父に言われたあの時の言葉。

あのころは信じていた。できもしないのに。

しかしある日。その夢は叶った。

てかだれだこのツンツン青頭。

目次

船乗りの夢	1
ぼーけんのしよ 1	6
ぼーけんのしよ 2	10

船乗りの夢

『なあ、○○。お前、将来どんな事をしたいの？』

夢に出てくる父との記憶。

「海にいきたい！」

『そうか、海にいきたいのか。海にいつて何がしたい？』

「船にのりたい…かな。」

『船にのりたいのか！よーしっ！』

『14歳になったら海を操るぐらいの立派な船乗りにしてやる！』

「やった!!」

なんて適当なことを言う父。それでも、自分は信じていた。

「14歳になりました。てなわけで、かつこいい船乗りになるために異世界にいつてもらうぞ」

そんな父が、またもや適当なことを言っていた。

「つてまてい！どういことじやい！」

「いやな、ちようど船乗りを探してる世界がだな」

「どういことなの…!!」

「そーんなことはどうでもいいんだよ！早く、異世界にいくぞー！」

「えー…てかその前にどうやっていくんだ？」

「そこに冷蔵庫がある」

……ん？

「その冷蔵庫にはコンセントがありません。」

……？

「そもそもそれは冷蔵庫ではありません」

……!?!

「それは異世界への扉（消費アイテム）です。」

「消費アイテムってなんだよ！」

「仕様だよ！」

「えー……」

「つべーこべー！いわずつ！とつとといけえい！」

そんなふざけた事を言つて、父は俺を冷蔵庫（仮）に押し込んだ。

「そんなんしても寒いだけ……え？なにこれ下がらないどどどどういことななののおおおおおおお!!」

こうして俺の船乗り生活がはじまる。

「まってっ！あたしはここにのこるわ。」

……誰だこの五人組!!

「ど、どうして!?!せつかくここまで来たのに。」

ごりごりのおっさんがそういうと

「無理じいはいよくないわ。だれかが船にのこってたほうがいいかも知れないし……。」

金髪美人がそう返す。

「じゃあバーバラ。留守番おねがいね。」

金髪美人が、『バーバラ』という茶髪の女性に向けていうと

「うんっ！」

と元気に返していた。

しかしすぐに

「わがまま言つてごめんね。」

と謝る。何か事情があるのだろうか。

と、そんな事を考えていると、青髪のツンツン頭がこつちに向かってくる。

えっと……話の内容から察するに危ない事をするのかね。

「……どうかお気をつけて。」

別に語尾にはてなマークはないんだからねっ。

自分が放つたその言葉に青頭は

「はいっ！」

と元氣よく答えた。

そして、茶髪以外の四人―残りの一人は黄色の人間―は船からおりる。

残るのは、呆然としている俺と何やら悲しい顔をしている茶髪の少女だけ。

えつと……

「……いい天気ですね」

やべえ！失敗した！なにこれ死にたい！

「ふふつ、そうね。たしかにいい天気だわ。」

茶髪の彼女はこちらを向いて微笑んだ。

その美しく、しかし悲しげがある笑顔に俺は見とれていた。

ぼーけんのしょ 1

「ふふっ。ありがとね、私が変わったから慰めてくれようとしてくれたんでしょ？」

「そんなことはないです。ただ気まずかっただけで……」

「結果的に慰めてもらえたからいいわよ。」

「あつ……その……ありがとうございます。」

大人のお姉さん相手じゃあそんなに考えて言葉はだせんのだよ。

しかも美人さん。

「お礼はこちらが言うべきよ、ありがとね。」

そう言つてこちらに、さきほどより悲しみのない美しい笑顔を向ける。

それに見とれていた自分は

「あつ……どういたしまして。」

なんて言葉しか言えなかった。

「でも、やっぱり悲しい顔だな。」

「あの……お姉さん。何か困っていたりしたら話を聞きますよ?」

俺のぼつきやろおお!!そんなこと言ったって話すわけないじゃないかああ!!

「……そうね。親しい人よりも、あまり知らない人のほうが話しやすいし。ちよつと聞いて欲しいわね。」

「……さっきまでの俺グツジョブ!」

「私ね。変なのよ。」

「変?どういふことだ……。」

「なんだか、記憶が曖昧だね。ミレーユ…金髪の人がね、笛を吹いたら、私が黄金の竜になつちやうつていう記憶があるのよ。」

「黄金の竜……ですか」

「うん。それでね、いきなりのことだからパニックなつちやうのよ。でも体は勝手に、動いていく。」

「違う場所の記憶かもしれないじゃないですか」

「いいえ、その前にこの船で、ムドーを倒しにいく話をしていた記憶もあるのよ。船の操縦士は違ったけどね。」

「違う操縦士……ですか？」

「うん。君みたいな若い子じゃなくて、おじさんって感じの人だった。」

「お、おじさん……」

「ふふふつ。それでね、自分の思い通りには動けない。でも竜になることはわかってる。このままついて行ったら、みんなにばれちゃう。」

「ばれてもいいじゃないですか？」

「ばれて、もしもみんなが私のことを怖がったりしたら、私何をしちゃうかわからないもの。」

「ならしつかりと心がければ……自分の思い通りには動けないのか……」

「なんとも難しい……」

「……ありがとね。君のおかげで少しは気が楽になったわ。」

「お役にたてたのなら幸いです。」

「あら、もうこんな時間……もうすぐ呼ばれるかもしれないわ。準備してくるわね」

「はい。気をつけてくださいね。」

「ありがと。……あと、「お姉さん」じゃなくて、名前で呼んでくれると嬉しいわ。じゃあね。」

「そういつて茶髪……バーバラさんは船から降り、広い場所に移動した。」

「バーバラさん、か。最近の中二病は凝ってるんだなあ。」

ぼうけんのしょ2

未だにバーバラさんは草原に立っている。

「くっ……!!」

バーバラさんが苦しみました。きつと右手がああてきなやつなのだろう。

「はあっ……はあっ……!!」

すごい。まるで本当に変わりそうな感じだ。ここまで演技ができるのならば将来は女優を志したほうがいいんじゃないかね。

「……。」

いきなり静かになった。賢者タイムかな。なんか体がぼやぼやしてるな。

まじでドラゴンになってる!?

ちよっ、まっ、うええええ!? アイエエ!? ナンデ!?

「グギヤアアオ!!」

バサツ……バサツ……。

一つ、大きく吠えたあとに、彼女は飛び立った。

「これまじで魔法とかあるん……？」

「てなわけで魔法を試してみようとおもう！」

もしここが『ゲームの世界』ならば、よくある念じたらウィンドウがでてくるとかがあるのだろう。もしくは頭に浮かんできたり。

ということ……で……で……で……！ウィンドウウウウウ！！
つてうおっ!!頭に何かが……。

1 ミズキ

いせかいのしょうねん

船乗り

しんまい乗組員

なんだこれ!? ドラクエみたいなウインドウきたこれ!

これで名前を押す動作をすれば……でてきた!

レベル:15

ちから:97

ずばやさ:80

みのまもり:255

かしこさ:60

かつこよさ:40

さいだいHP:800

さいだいMP:200

こうげき力:200

しゅび力:1%い7d6392\$1

Eしんまいの服

Eしんまいの帽子

Eしんまいのバッジ

かつこよさ40か！はっはっは！

余計なお世話だよ！！

てかなんだよ！みのまもり255て！HP800て！！かしこさ60？余計なお世話
だわ！！

しゅび力なんてみえてないよ。

服装もいい感じだね。ここからもういつかいボタンを押せば……

ふなのり

★

……この画面は知らないな。ドラクエじゃないのか？それとも知らないタイトル？
俺ⅢとⅩだけしかやったことないからなあ……。

もう一回押したら……

ウオタラ

ウオタガ

ウオタジャ

スプレッド

スプラッシュ

アクアレイザー

ウンディーネ

ファーストエイド

レイズデッド

残念だったな！もう驚きはしない！

とことん水魔法だな。てか回復魔法も水なのね。

バーバラさんが帰ってくるまでに色々ためしてみるか。それに中二病って思ったこと謝んなきゃいけないし。

まずは最初に……ウオタジャってやつをやってみよう！名前からして水だし！

ミズキ は ウオタジャ を となえた !!

ドドドドドドドドドドドドドドドドドド

ん？なんか揺れてる……地震かな？

ドドドド……ドザアアアアア!!

……別に水が大量にできて近くにあった島が飲み込まれたなんてことはないよ。
ほんとだよ。

こんな調子でこのあと大丈夫なのかよ!!